FOCUS 日本の医療現場

大学と連携し、質の高い医療を提供
地域住民に安全で最新の医療を保証

清水 輝記 先生　パナソニック健康保険組合 松下記念病院 泌尿器科部長（大阪府守口市）

パナソニック健康保険組合 松下記念病院の泌尿器科は、大学との強固なつながりを背景に、知識・技術のアップデートに努めるほか、希少疾患や難易度の高い手術は大学からエキスパートの医師を招聘するなどによって、医療の安全性と質を担保しています。検査機器も効果が見込まれるものについては積極的に導入し、高度医療が必要な地域の泌尿器科疾患の受け皿としての機能を果たしています。

施設概要

所在地／大阪府守口市
病床数／323床
診療科目／救急科、総合診療科、足病診療科（足病センター）、糖尿病・内分泌内科、呼吸器内科、血液内科、消化器内科、肝臓内科、循環器内科、脳神経内科、精神神経科、外科・消化器外科、乳腺外科、呼吸器外科、脳神経外科、整形外科、小児科、産婦人科、皮膚科、泌尿器科、眼科、耳鼻咽喉科、麻酔科、腎臓内科、緩和ケア内科、放射線科、歯科口腔外科、膠原病・リウマチ内科、病理診断科・臨床検査科、リハビリテーション科
開業年／1940年

POINT

- **大学から医師の派遣を受け、幅広い疾患に対応するとともに、最新の知見のアップデートに努めている。**
- **MRIフュージョンバイオプシーを導入し、前立腺針生検の精度を飛躍的に向上させている。**
- **地域の医師と顔の見える関係性を構築し、連携を深めていく方針を掲げる。**

高難度症例はエキスパートが指導 大学で得た知見を自院に導入

がん診療拠点病院としての役割

パナソニック健康保険組合 松下記念病院の泌尿器科は、排尿障害や尿路結石などの良性疾患から、腎、腎盂尿管、前立腺、膀胱などの悪性腫瘍まで幅広く診療しています。緩和ケア病床も16床有し、大阪府のがん診療拠点病院として、「積極的治療から終末期医療まで、どのような病期・疾患の患者さんでも地域の医療機関から要請があれば受け入れられるよう、体制を整えています」と部長の清水輝記先生は言います。

同科は京都市の大学と強固な連携関係があります。現在は泌尿器科常勤医3人体制で診療を行っています。清水先生自身、この大学で助教を務めた経験があり、難易度の高い症例や例数が少ない小児や女性の疾患についてはエキスパート医師を招聘し、指導を受けながら手術を行っています。こうしたつながりを通じて最新の知見に触れることも多く、診療ガイドラインのアップデートはもちろん、その時点で最適と思われるエビデンスに基づいた診療方法を取り入れています。

同科は医療機器の更新も積極的に実施しており、2024年12月には2022年に保険収載されたMRIフュージョンバイオプシー（MRI–超音波融合前立腺生検）を導入しました。以前から導入済みの手術支援ロボットと共に低侵襲かつ精度の高い医療の提供に役立てています。

新しい検査の導入が、結果や精度の向上をもたらす

MRIフュージョンバイオプシーは、実際にデモ機を利用した清水先生が患者さんにとってのメリットが極めて大きい技術

MRIフュージョンバイオプシーは超音波画像をリアルタイムで見ながらMRIの標的部位の組織採取が可能です。（写真提供：清水輝記先生）

であることを確信し、必要性を上層部に訴えることで導入に至りました。従来の前立腺がんの生検では、事前に撮影したMRI画像を頭の中で想像しながら、超音波画像を頼りにがんがあると思われる箇所に穿刺して生検組織を採取していました。「がんは超音波画像には映らないことも多いため、ターゲット部位に間違いなく穿刺するには熟練の技が求められます」と清水先生は話します。生検してもがん細胞が見つからず、PSAの数値だけが上がっていく中、2回、3回と生検を繰り返す症例もあったといい、「本当にターゲット部位を採取できているのか、病変が小さすぎて採取できていないだけではないかという懸念は常に付きまとっていました」と明かします。

MRIフュージョンバイオプシーはMRIの画像と超音波画像を融合させることができ、針の位置とがんの位置を目視しながら採取することが可能です。

「1cmに満たない小さなターゲット病変でも採取が可能になり、飛躍的に生検陽性率が上がりました」

実際、従来法ではどうしても病変が採取できなかったがん組織をMRIフュージョンバイオプシーで同定できた事例も多く、現在ではPSA高値の患者さんは基本的に同検査を用いて再検査する流れが確立されています。

MRIフュージョンバイオプシーによって医師の生検のラーニングカーブも緩やかになり、「いまや医師の技量による検査結果の差はほぼ無くなり、サンプリングエラーが起きにくいという意味でも優れた検査法です」とその有用性を強調します。

同検査を導入している病院はまだ多くありませんが、清水先生は「いずれ検査法のスタンダードになるのでは」と考えています。その有用性をできるだけ多くの医療機関に周知し、住民に利用してもらうことで、地域の前立腺がんの早期発見に寄与したい考えです。

顔の見える関係性の構築を重視
前方・後方連携による役割分担

講演会・症例検討会などを通じ交流を深める

清水先生がいま力を入れているのが、地域の医療機関との連携強化です。

「この地域の患者さんは症状がかなり進まないと病院を受診しないケースも多く、中には血尿が出ていても何カ月も受診しない患者さんもいらっしゃいます」

このような状況を踏まえると、診断が付いていないだけで実は疾患を抱えている住民が相当数いるのではないかと考える清水先生は、地域医療機関の協力を得て各種検診やPSA検査などを普及させることで、潜在患者を顕在化させる必要性を痛感しています。

同院でも市民公開講座などを通じて住民への啓発活動を定期的に実施しています。また、地域の医療機関のドクターを対象にした地域連携の会を開催し、MRIフュージョンバイオプシーをはじめとする自院の特徴や受け入れ体制を周知する活動も行っています。

「地域の先生と顔の見える関係性を築くことに大きな意義があります。地域連携の会などを通じ、相談してよいか悩むようなちょっとしたこと、逆に対応に苦慮する難しい症例などをいつでも気軽に相談してもらえるようになればと考えます」

後方連携は病院の“至上課題”

同院では医療機関からの紹介対応だけでなく、急性期治療後、状態が落ち着き処方も安定した患者さんの経過観察を担う医療機関への逆紹介にも力を入れています。「ベッドや外来の空きがないと、手術や重い副作用を伴う抗がん剤治療の患者さんを当院で受け入れることが難しくなる」ことから、このような後方連携は病院の“至上課題”と強調します。

ただ、後方連携は医療機関ごとに受け入れ可能な疾患、病期、治療法が異なるという課題があり、現時点では症状が安定した時点で、患者さんが希望する地域の医療機関に受け入れ可否を確認しています。今後は、抗がん剤治療やホルモン療法など対応が難しい治療法についても各施設に聞き取り調査を行い、将来的には受け入れ可能な病医院の一覧表を作成し、地域医療機関に過度な負担が生じないよう配慮しながら、できる限り多くの患者さんを逆紹介していく方針です。

同院は地域全体の泌尿器科医療の質向上のため、多施設が参加する症例検討会を開催するなど、病院間の横のつながりの強化にも尽力しています。清水先生は、最新の術式に取り組む際には大学の垣根を越えてエキスパートの医師を招聘するなど、連携の輪を積極的に広げることで「地域の医療の質向上、診療の幅拡大に寄与していきたい」と今後の抱負を語られました。

「前方連携はもちろん、病院機能の維持には後方連携が“至上課題”」と訴えます。

提供／アステラス製薬株式会社　発行月／2025年12月
発行／株式会社ジーエムジェイ（〒103-0014 東京都中央区日本橋蛎殻町1-16-8 水天宮平和ビル5F Tel.03-5651-7692）
Esu41296A01